

2013 年度台湾数学会年会訪問報告

国際交流担当理事 堤誉志雄

2013 年度台湾数学会年会が、去る 2013 年 12 月 7 日～8 日の期間、台湾高雄の国立中山大学で開催され、日本数学会訪問団の一員として訪問した。日本数学会は、元理事長の森田康夫氏と谷島賢二氏のときに、それぞれ韓国数学会と台湾数学会の間に協定を結び、毎年交互に訪問団の派遣・受入事業を行っている。今回の訪問団は、日本数学会



開会式 舟木理事長

理事会の開催を兼ねていたことから、数学会理事長の舟木直久氏、および宮岡、坪井、小磯、小谷、小菌、今野、徳永、戸瀬、堤の理事 9 名、さらに数学会事務局から事務長の張良氏を含めた 4 名と、KNOPPIX/math プロジェクト紹介のために参加された福岡大学の濱田龍義氏の計 15 名という大所帯となった。台湾数学会の会員は約 500 名で、そのうち年会参加者は 200 名前後と、日本数学会に較べるとかなり小

ぶりであるが、4 つの全体講演と 9 つのセッションに分かれた講演会（日本の分科会講演会に相当）が行われ、台湾における数学会活動の活発さがうかがえた。日本側からは、小磯深幸氏（九州大学マス・フォア・インダストリ研究所）が、“Geometry of hypersurfaces with constant anisotropic mean curvature” という題目で全体講演を行い好評を博した。また、日本数学会からの訪問団とは別に、渡部敏明（一橋大学）、長倉大輔（慶應大学）の両氏が統計のセッションに招待され講演を行った。台湾数学会年会では各種顕彰の発表も行われ、今回は、特殊貢献賞（日本の関孝和賞に相当）を Neil Trudinger 氏（オーストラリア国立大学、非線形偏微分方程式）、学術賞（日本数学会秋季賞に相当）を李瑩英氏（国立台湾大学、微分幾何）、青年数学家奨（日本数学会春季賞または建部賢弘賞特別賞に相当）を班榮超氏（東華大学、力学系・エルゴード理論）、傑出博士論文奨銀牌奨を關汝琳氏（国立台湾大学、逆問題）、傑出碩士論文（日本の修士論文）銀牌奨を吳卓翰氏（国立交通大学、数値計算）がそれぞれ受賞した。傑出博士・碩士論文



小磯深幸氏

奨は、日本数学会の建部賢弘賞奨励賞とはだいぶ趣が異なるようで、若手育成という観点からは台湾の事例から学ぶことも多いと思われる。

筆者は現在日本数学会の欧文誌 **JMSJ** の編集長をしている関係で、台湾数学会理事長の張鎮華氏と日本、台湾の数学会誌について話をする機会があった。今年度日本数学会が「国際情報発信強化」科研費を採択されたことにより、**JMSJ** に掲載された論文で現在の数学に大きな影響を与えた論文 16 を選び、それらを収録した **USB メモリー** と **JMSJ** の宣伝冊子を作成し、台湾数学会年会でも配付した（数学会事務局によると、これは非常に好評だったそうである）。それを見た張氏から、「**JMSJ** は歴史もあり、多くのすばらしい論文を掲載して来たことがよく分かった。台湾の数学会誌は比較的新しく、とてもうらやましい。」というコメントを頂いた。しかし日本でも台湾でも、良い論文は欧米の有力雑誌に投稿する傾向が強く、どうすれば良い論文を自国の数学会誌に投稿してくれるようになるか、という共通の悩みを抱えていることも話題となった。

年会初日の晩には、高雄市内の台湾風海鮮料理レストランで懇親会が開かれた。日本からの訪問団も招待されたが、民族音楽演奏やカラオケもあり（ただし、お酒はほとんど無し）、日本数学会年会の懇親会とはかなり様子が異なり少し戸惑った。実は筆者は、一昨年の韓国数学会年会にも、日本数学会からの訪問団の一員として出席したが、やはり立派な食事会が催された。台湾、韓国の数学会年会は、社交の場としての意味合いも強いようである。実際、両国の数学会年会では参加料を徴収し、それに懇親会費も含まれているとのことであった。

筆者は台湾数学会年会終了後、新竹の国立清華大学にある国家理論科学センター（National Center for Theoretical Science）を 3 日間訪問した。国家理論科学センターは、数理科学と理論物理およびその関連分野を中心として、台湾の理論科学発展の核となることを目指した台湾政府直属の研究機関である。清華大学の国家理論科学センターが本部であり、支所が国立台湾大学（台北）と国立成功大学（台南）にある。現在台湾の経済状況が良くなく、経費削減のために国家事業の見直しが行われており、この国家理論科学センターの組織改革も検討されているとのことであった。日本、台湾、韓国は、少子高齢化、経済の空洞化など、直面している社会・経済状況が似ている。科学振興予算が大きく増えることは期待できない状況の中で、数理科学を含めた自然科学全体の東アジアにおける共同研究推進は、今後重要な課題となるであろう。数学においては、日本数学会は大きな役割を果たすことができるのではないかと感じた。



日本数学会ブース